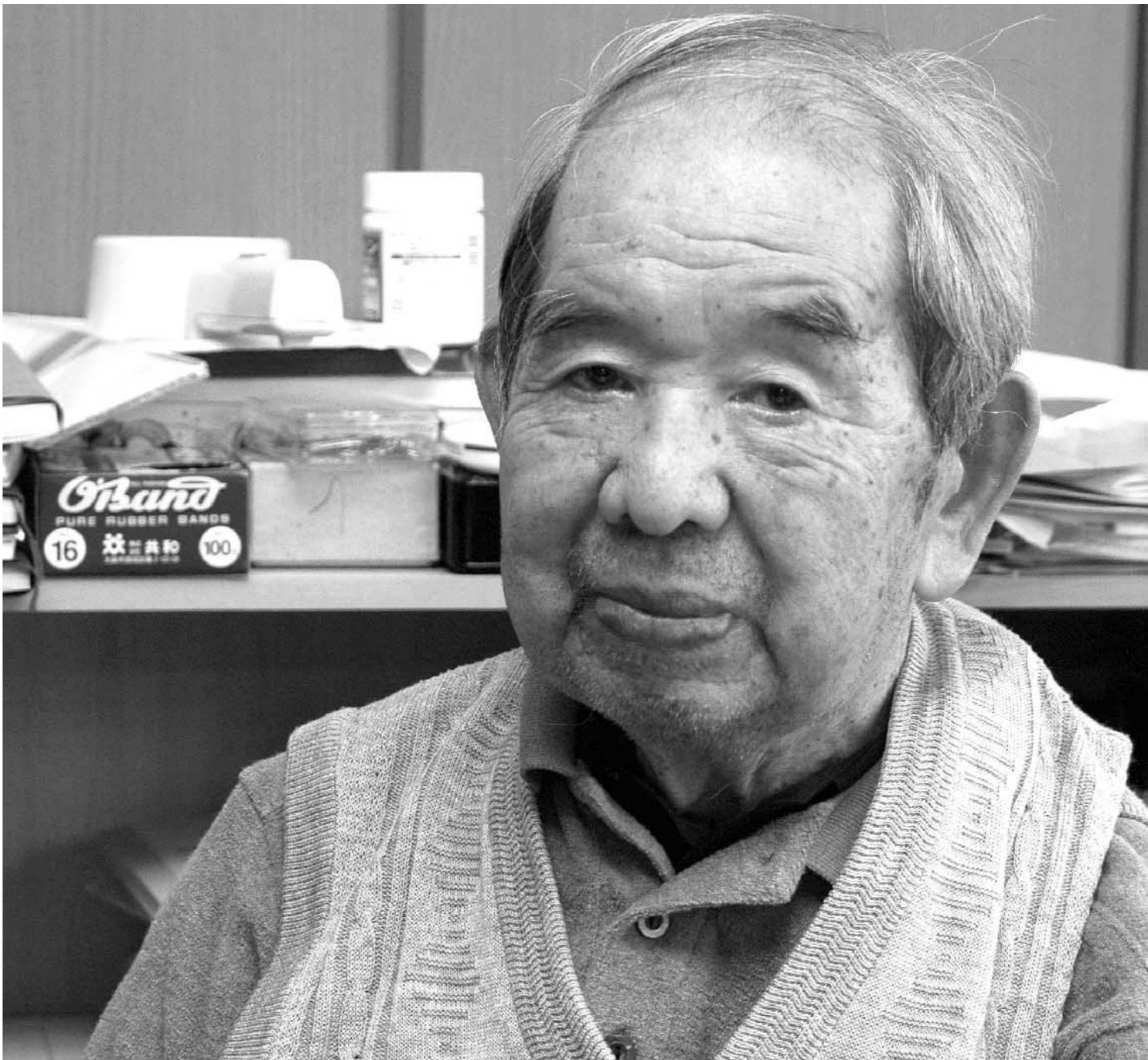


教え子と共に

丸山敏文さん（96歳・堀金三田）

「今でも短歌を作るのはむずかしいと語る。」



昭和62年に第1歌集「芽生」を出版してから4つの歌集を作成し、現在も歌誌『露草』の代表を務める丸山敏文さん。近日出版予定の第5歌集「道」を校正中のところ、お話を伺いました。

喜寿を過ぎてから、第1歌集を出されたそうですが。

短歌には以前から興味がありましたが、本格的に始めたのは、露草の会員となった43歳からです。最初の歌集は、会員となつてから10年間の歌をまとめたものとなりました。

これは私の喜寿を祝って、露草の仲間や、教員時代の教え子、友人たちが庭に歌碑を建ててくれることになり、これに併せて出版することにしたものです。

出版された歌集には、どんな思いを持っていますか。

第1歌集の「芽生」から「峠」「足跡」「清流」と年代順に作成することができました。現在作成している「道」が出版されれば、計画していた歌集がすべて出版され一区切りとすることができます。

それぞれの歌集の表題は、伊那で過ごした10年間の教員時代に、教え子とともに作った5つの文集と同じ名前になって

短歌は自分の生活の一部として溶け込んでいます。

5つの歌集の表題は、教え子と作った文集と同じ名です。

います。ひとつずつ丁寧に手作りで作成したこの文集は、私と子どもたちが一緒に歩んだ軌跡であり、今でも大切に保管しています。私のかけがえのない宝物です。

大変お元気ですが、昔は大病を患ったそうですね。

20歳から伊那地方で教員を勤めていましたが、30歳の時、肺結核を患い

ました。大変残念でしたが、教え子たちと別れることになってしまいました。当時、結核の特効薬はなく、治療には、きれいな空気と静養と栄養しかないといわれていました。大変な挫折感を味わいましたが、幸いにもこの療養期間中にはさまざまな文学書を読むことができました。これはその後の自分の人生にとって、大変役に立ちました。

病気が完治してからは、どのような生活を送られましたか。

病もだいぶ良くなり、37歳の時には妻

短歌は自分の生活の中に溶け込んでいますが、自然に浮かんでくるようなものではありません。今でも簡単にはできませんが、毎日書きとどめるようにしています。また、歌集とは別に、教員1年目までのことを昨年末に本にまとめたいと思っています。

これからの短歌とのかわりと抱負を聞かせてください。

肺結核が治ってからは、大きな病気にかかることもなく、風邪もひかなくなりました。現在も、どこも悪いところはなく、医者にもかかっていません。息子のお嫁さんが栄養士の資格があって、毎日、私の食事を作ってくれているので、そのおかげだと思えます。

↑歌集の題名にもなった文集。丁寧に手作りで作成した。

